

算学 武士道

小野寺公二

答積八十四歩



圆锥法

七角、を不離法三、也、別積をぬる

樹曰徑寸をを合する寸と云

答積六十八歩九分七三六

寸高七寸横何程と同

亦圆锥法七角八、を不離法三、也、別積をぬる



文藝春秋

樹曰徑寸と

答積百三

圓壺あり徑四寸高九寸積

算学 武士道

小野寺公三

文藝春秋

著者略歴

大正9年(1920年)、岩手県生まれ。中央大学経済学部卒業。主な著書に「平泉落日」、「新宿旗本無頼」、「滅びの果実」、「南部一揆の旗」などがある。

算学武士道

一九八九年二月十日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 小野寺公二

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三
電話代表(〇三)二六五一—二二一

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Kohji Onodera 1989

Printed in Japan

ISBN 4—16—310770—3

目次

算学武士道	5
出世の算法	37
行商算法	69
偽りの算法	103
百五十年後の仇討	153

算学武士道

装幀 坂田政則

カバーの図版は『當用算法』（嘉永年間刊行）より引用

算学武士道

玄関を出てくる母の顔は、月光を浴びて青白く見えた。

目鼻の暗い陰翳は、疑惑のかげのようでもあるが、おそらく、まだはっきりした疑いを持つまでには至っていないだろう。

戸じまりをする母を、保はじっと見つめて待った。もうこの家に戸じまりなどしても仕方がないのに、と思いながら――。

つれだって掘立門を出るとき、門のわきの豆柿の高枝から、ふいに夜鳥が飛び立った。

陰曆九月の十三夜の月が、白銅鏡を磨き上げたように冷たく鋭く輝いている。

月見がてら、自分がこんど奉納した算額を見に行こうと、母を誘い出したのである。

「なぜ、夜分に行くのですか」

「昼では、人目ひとめがあつて恥ずかしいからです」

算法というものを初めて知ったのは、隣家の当主、宍戸軍治がやっているのを見てからである。そのあと、算盤の師匠せしやうから関流算学せきりゅうの初歩を教へてもらったことが機縁でこの道に入ったが、次第に興味が深まり、元服のころには大人の算師たちと技をきそうようになっていた。ものごとを、心の内側へまぐれ込むように考える性格の保には、向いていたということなのである。

算学を学ぶのは趣味にすぎない。この学問は実用算術の進んだもののなのに、高級になればなるほど実生活から遠ざかり、日常の役には立たないものになる。ほかの学問とも何の関わりもない。学ぶのは藩からの命令でもなく、生計の手段でもない。町人でも好む者は学ぶことを許されている。それだから、父などはそのような無用のものにうちこむ保が気に入らず、いつも小言を言っ

ていた。そんな遊戯にふける暇があったら、縄でもなえと、憎さげに、よく言われた。碁将棋のたぐいを嫌い、気散じにしても栗拾い茸取りと、父は実益からはなれられない人だった。

たしかに無用の遊戯とは思いますが、それを究めることによって何かが生まれはしないかという夢想もあった。この世の原理のようなものに、もしや触れることが出来はしないかという、あわい望みもなくはなかった。問題の解術を習う面白さだけではなく、算学のしきたりとして、難しい問題を自分で考え出し、その解法を見つけ出して、問と答を板に書いて額がくにして絵馬のように神社に奉納する慣習がある。算学を学ぶ者には、それがまた何物にも換えがたい喜びなのであった。なかには、問題だけを書いて誰かこれを解いてみよと呼びかけている額があって、その挑戦に応じてやろうと、各地の神社をめぐり歩いている算師もある。みごと解くことが出来たときは、何国何郷の某がこれを解いたと解法を書いてかかってくる。夢中で諸国をわたり歩いて妻子を顧みない者もある。——保もまた、そういうおろか者の一人だった。

「この道からも八幡さまへ行けるのかえ」

「先きに月見をしましょう」

後の月見など、肌寒い時節で老人には向かない。しかも、道は山手にかかっている。山道をたどって、どこへ月見に行くというのか。妙な話だったが、それでもさからわずに母はついてくる。子供のころから、母は保に甘かった。なんでも言うことをきいてくれた。長男を幼いうちになくしているからかもしれないが、ひと一倍、大事に育てられてきた。風邪をひいて鼻がつまると、母はよく口で鼻汁を吸い出してくれたりした。だが、その甘い母にしても、今夜の不自然

な外出に不服も言わずにしたがってくるといふのは、やはり奇妙である。おぼろげに覚^きりかけているのかもしれない。保のほうも、すこしずつ覚^きらせるような言い方をしてきた気がする。母がひとりでにわかつてくれるなら、好都合であった。

今度は特に目ざましい算額を奉納したから見てほしいのだと言って、母を誘い出したのだが、実は、見せると言った新しい算額など、どこにもないのだった。

「こう行けば、堤^{つみ}のほうではないかえ」

保は、もう答えなかった。

これ以上、言葉をやりとりすることは無いと思った。母は、もはやただ不安をまぎらそうとしてものを言っているだけのようでもある。

奥歯を噛みしめながら、保は黙ってぐんぐん歩いた。ここまで来て、母が行くことを拒むなら、背なかへくくりつけてでも行くしかなかった。

徒目付だった父がお役をやめたあとは、勘定方へ勤める保の些少な俸禄が主な収入である。わずか一万六千石の水沢藩のことだから、城下士といっても郷士に毛の生えた程度である。田もすこしあるが、やっと飯米だけしかとれない。

その田へ、非番の今日は仕事に行ってきたところだった。長雨があがったので、稲架^{はさ}の稲束を乾かそうと掛け替えに行ったのである。

板の間で、内職の網結あみすきをやっている母に挨拶してから、

「母さま。冷えるのはよくありませんよ。何か敷かれたらどうですか」

円座わづなも敷いていないのを横目に見ながらそう言い足して、母の返事をきかないまま、自分の部屋に入った。

やりかけの問題、「鉤股弦こうこげん内三円径和」を早く解きたかった。問題に挑もうとする軽い興奮のなかで、いつも何か声をかけてくる母が何も言わなかったことが、意識のはしのほうにひっかかっていた。

夢中で、定規と両脚器を動かしているうちに、ふと父のことが気になった。

お城からさがってきたときなど、外からの帰りに、たいてい父の部屋をのぞくのだが、今日は、まっすぐ自室へ来てしまった。

父は、いまはすっかり耄碌もちろくしてしまい、座敷牢同然の部屋に、終日つくねんとしている。正気のころより間のびしたような長い顔には、意志も感情も全く見られない。あれほど気難しかった人が、こんなになってしまったかと思うと、あわれでならない。家のなかにばかり置いては運動不足になるので、ときどき母や保が散歩につれ出すが、根が丈夫な人だけに、頭はぼけても足は達者で、うっかりするとつれて歩くほうが置き去りにされそうである。

歩くことが好きなので、ふだんは部屋の戸にかぎをかけておく。大小便はたれ流しになったから襦袢じゅばんをさせられているが、ときどき自分でそれをはずして着物や部屋をよごす。汚れ物を洗ったり掃除したりするのは母の仕事になるので、寒い間は母の手の荒れがひどい。母には、腕の痛

む持病がある。肘や指の節が腫れている。傷寒毒という病氣だと、医者は言っている。いつか父の部屋へ行ってみると、罪人のように両手を縛られていたことがあった。いくらなんでもあまりひどいと思ったが、母の苦勞を考えると、母を責める気にもなれなかった。父の粗相をした肴物や、布団に敷いている襪ばうなど、大きな物を洗うときは、都合がつくかぎり保が手伝う。母が一人で洗い物をする時、腕の痛みで絞しぼりきれないから、水が垂れるまま竿にかける。冬はそれが板のように凍って、風が吹けば雨戸を叩いた。腹をこわされるとまわりが困るので、父の食事は量を控え目になっているが、それでも父は、もっとほしいとも言わない。

算学仲間の林謹之助から、『算法通考』を借りてきて筆写しているとき、すでに写しとった紙が数枚、紛失したことがあった。まもなく、父の部屋の隅に、紙に包んだ鬼の糞のようなものが見つかったが、その紙が紛失した写本の一部だった。考える力がなくなった頭にも、算法を憎んだ気持はまだ残っているのだろうか、背すじが寒くなるようだった。

この春あった嫁の話は、先方の母親が反対したとかで、こわれた。そのような家へやれば、過重な労働を嫁一人でひっかぶることになるというのが、先方の母親の反対する理由だったらしい。去年の冬、立生館りやうしやうかんの寒中競走のとき、見分森で折り返しての帰りみちで、足が攣つって走れなくなった。競走などに出たくはなかったが、藩校の生徒以外にも二十五歳未満の者は参加しなければならぬきまりがあるので、やむなく出たのである。雪の降るなかでしばらく息いきで腓こむちを揉んでから、足をひきずって帰ってきたが、むろんどん尻だった。一緒に走った連中は、講堂に集まって騒いでいた。

もともと武芸や競技は得手ではない。こういうものに加われば、きまって、異国へでも行ったような疎外感に落ちこんでしまうのが常である。

隅のほうに腰をおろして足を揉んでいると、手伝いの娘が見つけて、白湯と握飯を持ってきてくれた。

「どうかなされましたか」

と娘は、眉をひそめるようにしてたずねた。清楚な、武家の娘だった。

「いや。冷えただけです」

どぎまぎしながら答えた。

娘は、目顔でうなずいて戻って行った。

素足の指先が紅をさしたように赤らんでいるのが、いかにも初々しいものに目に残った。

もう、みんなは握飯を食べたあとで、駄菓子がしの芥子板かいしばんをむさぼりながら談笑していて、こちらに気をくばる者など居なかった。

子供のころから、つねに、そうだった。世のなかの人は、祭りの人波のようにさざめきながらむこうの通りを流れて行き、保は、いつもそれをながめているだけだった。

さきほどの娘が、教授の使う小さい手焙りてあぶりに炭火を入れて持ってきてくれた。保は、驚いて、礼の言葉もうまく言えなかった。

祭りの人波のなかから、ただ一人の娘が、こちらに目をとめてくれたのだった。炭火は、手焙りにあふれるほど熾もっていた。心のなかへ、他人の好意があたたかくしみこむを感じた。こう

いう経験は、生まれてはじめてのことのようだった。味噌漬け大根を刻んでまぶした握飯を、胸が一杯になるような思いで食った。

嫁にと世話されたのは、その娘だった。立生館の講堂でお目にかかったことがあると、娘は仲人に言ったそうである。

それ以来、家の台所などで立ち働く娘の姿を、よく想像した。あの娘が家に居てくれたら、どんなにか毎日が明るくなるだろうと思った。

おもかげが日夜ころのなかにあったから、話がこわれたときは、すくなくらず氣落ちした。だが、自分ら親子には、やはりまだ嫁をとる資格などないのだった。いまこの家へ来てくれる嫁があるとすれば、たしかに苦勞をしにくるようなものである。まだうら若い他家の娘を、この家に都合がよいように利用してよいものではあるまい。

思うようにいかないのは嫁取りのことばかりではない。好きな算学、——というよりも、自分が生涯のわざと決めている算学に、心ゆくまで打ちこめないのも、ひとえにこういう境遇のためである。

江戸へ出れば、算学の総本山にあたる長谷川算学道場の社友にしてもらえることになっている。師の千葉胤秀先生が推薦してくれている。関流永世算学師範の資格を持つ胤秀先生は、道場の三教授の一人として名の聞こえた人だが、文政十年に郷里、一関に帰って、老身の今も仙台領内各地をまわって好学者の者を指導している。

現在、長谷川道場は、長谷川寛の養子の弘の代になっている。これは胤秀先生が登米郡の佐沼

で見出した高才で、先生の世話で長谷川家の養子になり、関流七伝（関孝和から七代目）を継いだものである。弘は、ゆくゆくは道場の教授となる者を郷里のほうから求めたい意向だといふので、胤秀先生が保を推してくれているのであった。

水沢からは、すでに一人、長谷川道場へ行つて学んでいる者がある。水沢藩の御一家衆で家老の村岡将監の子息だが、これは保もよく知っている。左内といつて、保より三つ年下で、以前に将監が勘定頭をしていて上役だったころ算法の手ほどきをしてやってくれと頼まれて、しばらく教えたことがある。かくべつ天分がありそうには見えなかったが、優れた先生方について修業していることだし、もう二十一にもなるはずだから、いまではかなり上達しているにちがいない。さしたることはない後進、と思ひながらも、本場で修業しているやつという意識があり、後生を畏れる多少の不安と焦慮、それに妬心もないわけではない。

お前なら一人前の学者になれる。そう胤秀先生は言ってくれる。出て行きたい、と切実に思う。江戸で算学者として身を立てる――。思っただけで、心の臓が躍るようだ。しかし、この父母を置いて江戸へ出るわけにはいかない。母だけなら連れて出ることも出来ようが、父が居てはそれかなわぬ。母が傷寒毒におかされてからは、父の世話に保の手がよいかかるようになってゐる。四、五日かけて仙台の道場へ行ってくるぐらいがせいぜいで、江戸へなどは、講習を受けるに行くことさえ無理である。

これまでに、見題、隠題、伏題と、それぞれ初級、中級、上級にあたる三つの免許はもらっているが、その上の級の別伝は、江戸へ出て道場で直接指導を受けなければ取れない。別伝の上に